

氏 名 吉川 浩郎
学位の種類 博士 (医学)
学位記番号 甲第374号
学位授与年月日 平成24年3月21日
審査委員 主査 教授 足立 経一
副査 教授 紫藤 治
副査 臨床教授 今岡 友紀

論文審査の結果の要旨

胃食道逆流症 (GERD) の食道外症候群のひとつに歯牙酸蝕症 (dental erosion: DE) がある。DE は、胃酸の口腔内への逆流により口腔内がエナメル質の臨界pHである5.5以下となり発症する。一方、嚥下された唾液は食道内に逆流した胃酸を中和し、洗い流す作用を有し、食道に保護的に働いている。申請者らは、GERD患者における唾液分泌量および嚥下機能を評価し、さらにそれらのGERD患者の口腔内状態に及ぼす影響を明らかにする目的で本研究を行った。

島根大学医学部附属病院消化器内科でGERDと診断され本研究への同意が得られた40名 (平均年齢: 68.8歳)、高齢対照群15名 (平均年齢68.2歳)、若年対照群15名 (平均年齢28.9歳) を対象として、齲蝕罹患状態を評価するDMF index、歯肉の炎症を評価するPMA Index、口腔清掃状態を評価するOHI-S、サクソテストによる唾液分泌量測定、反復唾液嚥下テスト (RSST) による嚥下機能検査を行い、その結果をGERD罹患患者、高齢対照群、若年対照群で比較検討した。その結果、DEはGERD患者9名 (24.3%) にみられ、他群では認めなかった。また、GERD患者では歯牙欠損のためPMA Index、OHI-Sは高齢対照群に比して低値であったが、DMF indexは高値であり、GERD患者における口腔内環境の悪化が明らかとなった。また、GERD患者では唾液分泌量が他群に比して有意に低下しており、RSSTにおいても30秒間の嚥下回数が少なく、初回嚥下までの時間の延長が観察された。GERDの重症度と口腔状態、唾液分泌量と嚥下機能には明らかな相関は認められなかった。

以上のことから、GERD患者においては、唾液分泌量の低下、嚥下機能の低下が観察され、それがDEなどの口腔内の状態に影響していると考えられた。今回の検討にて、GERD患者ではより綿密な口腔ケアが必要であり、さらに、唾液分泌や嚥下機能を高めるための唾液腺マッサージや嚥下訓練を行うことの重要性が明らかになったと考えられる。